

給食室での様子から、生徒の「変化」を知る

～摂食率統計結果を指導に活かす～

はじめに

■きっかけは、給食員さんの『2回目給食に来る生徒が多すぎる』という声から

昨年度本校定時制課程にいた2名の給食員は、いずれも10年以上に渡って本校に勤務している事情通で、生徒の名前もしっかり覚えて声かけをしてくれる方々でした。給食提供時は、生徒のあいさつの声や食事の様子からその日の心身の調子を読み取って教員にそのことを知らせてくれていました。生徒の交友関係も把握していて、職員数の少ない定時制にとって教員同様に生徒の見守りに貢献してくれていました。

そんな給食員さんたちから私が赴任して早いうちに聞かされたことは、「2回目の給食時間にやってくる生徒の数が今年は例年に比べて多い」ということでした。

本校の給食時間は1回目が16:50-17:20、その後SHRと1校時を挟んで18:20-18:35に2回目の給食時間を設定しています。アルバイト等で16時台まで就業している生徒を想定して2回目を設定しているのですが、給食員さんがおっしゃるのには2回目に「働いていない子が多く来ている」らしいのです。

アルバイトで時間に追われている生徒が利用しているのであれば趣旨どおりですが、それ以外の生徒となれば「単に時間管理が甘いだけでは？」と考えられます。「自律 創造 向上」を校訓とする本校としては、自律＝自己管理の面からも生徒への指導が必要ではないかという意見が持ち上がりました。

■課題の認識のため、まずは現状調査から

2回目給食に来る生徒が多いとは言うものの、実際にどれくらいの人数が来ているのか、まずはその調査から始めることにしました。

給食室に入室した生徒はまずは手洗い場で手指をしっかり洗い、カウンター付近に置いてある自分の氏名が記載されたカードを探して所定のケースに入れます。このカードの提出状況を元に1回目・2回目で給食を食べている生徒数の記録をとることにしました。

ずいぶん以前からカード提出をさせていたとのことでしたが、提出されたカードを確認して誰が食べているのかやどれくらいの人数が食べに来ているのかなど、何かしら記録や分析をするようなことは今まで行われていませんでした。何ら意味のないカード提出を続けさせていたわけですが、ここに来て立派な目的を持たせることができたわけです。

本校の現状

■旭川市と本校の概要

本校の所在する旭川市は人口約33.2万人、札幌市に次いで道内第2位、道北地区では最大の都市です。主要国道4本、JR4線の始終点となっているほか、平成2年10月には道央自動車道が旭川まで開通、さらに平成9年2月には旭川空港2,500m滑走路が供用開始されるなど、北北海道の中核都市のみならず、道北・道東地域の商業流通の拠点都市として着実に発展を遂げています。旭川市内には道立9校と私立5校、計14校の全日制高等学校があります。定時制課程はこのうち道立4校に設置されています。

本校は昭和15年に市立中学校として開校、定時制課程は昭和28年に併置されました。昭和30年から52年までは2学級を有していた定時制ですが、53年以降は1学級のみとなりました。

ここ最近では各学年10数名、定時制課程全体で40数名という生徒数で推移しています。今年度は6月末現在、全体で在籍が39名、男女比率はおよそ4:6で、若干女子の在籍が多い状況です。

■教職員

7名（国語科、地歴公民科、数学科、理科、英語科、保健体育科、情報・商業科に各1名）の教職員、養護教諭1名、事務員1名、給食員2名に教頭の構成です。授業を担当する7名の平均年齢は55.6歳です。7名中4名の先生が市内の全日制・通信制高校にて時間講師を兼任しています。

■生徒の様子

□授業中の生徒

各学年10名前後の在籍の小さなクラスで、授業中立ち歩いたり私語が聞こえることは一切ない。多少の個人差はありますがノートをしっかりととりながら授業者の声に耳を傾け、質問に対して真摯に答えようと集中している様子が見受けられます。

昨年度卒業生12名の中には大学へ進学した生徒が2名いました。うち1名は一般入試で道内国立大学へ進学しています。今年度も1名が大学進学を目指しており、どの学年にも大学進学志望者がいる状況です。

□就労状況

今年度6月末現在、アルバイト等に就く就労生徒の割合は全体で38.6%で、1学年には今のところ該当者がいません。昨年度5月末現在では55.6%、1学年は3割強でしたから就労者率はかなり低いことが分かりますが、今年度の状況には明らか新型コロナウイルス感染症が影響していると考えられます。実際、営業自粛要請が出された際に『アルバイト先から「明日から来なくて良い」と連絡が来ました』と切なそうに教えてくれた生徒がいました。

■指導事故や転退学者

生徒の生活は校内外ともに落ち着いています。過去5年間の指導事故件数は右表のとおり少なく、家庭謹慎等以上に該当する重大案件は発生していません。

昨年度の転退学者数は6名ですが、そのうち4名は高校卒業後に大学進学等を考慮しての進路変更です。自らの将来を見据えた前向きな進路変更が理由でした。

※過去の指導事故件数

年度	H28	H29	H30	R01	R02
件数	2	0	5	1	1
重大	0	0	0	0	0

■6割超が不登校を経験

市内他校定時制では8割という例もあるので本校が取り立てて高いわけではないのですが、本校定時制課程に通う生徒のうち64.1%、およそ3人に2人が不登校を経験しています。

中学生の時に教室で授業を受けたり体育や部活動で体を動かしたりした経験に乏しいため、リテラシーおよび基礎的運動能力に課題を持つ生徒が見受けられます。

※中学校で不登校を経験した生徒数とその割合

学 年	1 年	2 年	3 年	4 年	合 計
在 籍	11	9	13	6	39
不 登 校	8	5	7	5	25
100日超	6	3	5	3	17
割 合	72.7	55.6	53.8	83.3	64.1

※中学校在籍3年間のうち、年間30日を超える欠席が1年以上あった生徒を『不登校』欄に計上。そのうち年間100日を超える欠席が1年以上あった生徒を『100日超』欄に計上。

給食の現状

■給食委員会について

本校では教職員1名が給食担当(養護教諭が担当)として事務担当者や給食員と打ち合わせを行ったり生徒への「食育」の一環として定期的に「給食通信」を作成・発行しています。また、給食提供を円滑に行えるよう「給食委員会」も設置されており、委員会の構成員である給食員、事務担当者、教職員、管理職それぞれの立場から現状報告や課題を提示するなど、情報共有をしています。

■給食調理員のこと

□「愛情」というスパイス

昨年度末、2名の給食員のうち1名が退職しました。再任用4年を含め15年間生徒のために尽力された方で、年齢による負担を感じてのことでした。離任に当たってのあいさつの際に話された『「愛情」というスパイスを日々心がけていた』という言葉が今も印象に残っています。

他校定時制に聞いても、どこの給食員さんも長年にわたって従事してくれている方だからこそ生徒の状況についても理解があり、生徒指導の一翼を担ってくれているといえます。給食室での生徒の様子を情報提供・共有してくれる、さながら「第二の副担任」といった存在です。

今年度替わりに配置になった1名は「会計年度職員」としての採用です。他校定時制で勤務されていた方でとても感じの良い方で大変助かっていますが、現在常勤の1名が退職すると、民間委託となる可能性が非常に高くなります。

□民間委託になっても弊害はない

本校を含めた市内定時制は4校、そのうち民間業者に給食を委託しているのは2校です。『民間委託されると生徒との関係性が希薄になるのでは?』と心配になり他校に実情を聞いてみると、「業者は毎年のように替わっているが、実際に給食員として来てくれる方は

同じ人」とのことでした。

民間委託になると途端にビジネスライクになって、人と人との関わりが薄らいでしまうのではと心配していたのですが、どうやら杞憂だったようです。

■給食費の値上げ

昨年度1年間の収支を見ると、給食費の値上げが避けられないことは自明でした。一昨年度の繰越金により昨年度はどうか遣り繰りできたのですが、今年度は在籍生徒数が減少し、収支のバランスは明らかに悪化することが当初から予想されていました。

結果的に生徒・給食員の教職員については、前年度比月額300円増という形で新年度をスタートしました。

摂食者数等統計を通して

■負担感の少ない記録作業

実際に調査を始めたのは令和元年5月の途中で、1ヶ月間統計をとれたのは6月以降になります。8月調査までは人数だけを記録していたのですが、9月調査からは「誰が食べていて誰が食べていないのか？」また「誰がいつ(1回目なのか2回目なのか)食べに来ているのか？」までが分かるように記録を取り始めました。こう聞くと「なにやら煩雑、面倒だな」と思えてしまいそうですが、毎日の記録をとるのに3分もかからないですしEXCELへの入力まで含めても毎回の所要時間は5分弱にしかありません。例年本校の在籍生徒数は40数名程度(今年度は6月末現在で39名)ですので、負担感なく継続ができています。日々の校舎巡回に比べればあっという間の作業です。

調査開始当初は全体への指導に活かすためにと人数の把握のみにとどめていたのですが、「せっかく指導するなら給食通信などによる全体指導だけでなく個別指導にもつなげられると教育効果が高いのでは」と考え、入力方法を変更しました。右表のような帳票に給食をとった生徒のセルに「●」を入力します(実際は数字1を入力、上段は1回目、下段は2回目に食べたことを示す)。別表でこの●の数を集計してその日の摂食者数や割合を計算するように関数を組んであります。この作業も最大で40数回「1」を入力するだけなので、負担感の少ない作業です。

※入力シート(例)

6月1日(月)は、生徒L～N、R、Sは2回目に摂食。生徒OとQは欠食。生徒Pは1回目に摂食しています。

6月は22回給食を実施していますが、生徒Lはそのうち6回しか摂食していません。

国教			22	国		2	2	2	2	2	2	2	2	2
ふり			22	国		1	2	3	4	5	21	22	23	
課														
6月						生徒	生徒	生徒	生徒	生徒	生徒	生徒	生徒	生徒
日	曜	備考				L	M	N	O	P	Q	R	S	
		その他												
摂食者数(名)										15	6	3	3	
摂食回数(回)						6	7	6				9	4	
摂食率(%)														
1	月					●	●	●		●		●	●	
2	火					●	●	●		●		●		
3	水									●			●	

この記録により、実際に2回目給食にはどれだけの生徒が来ているのか、また、どの生徒が特に2回目に来ているのかについて、情報提供ができるようになりました。

※6月の集計結果

摂食者数の平均は25.2名、摂食率64.7%。およそ3人に2人が給食を食べていることが分かります。

6月																					
日	曜	備考 その他	1 学年			2 学年			3 学年			4 学年			男子1	男子計	女子1	女子計	男女1	合計	
			男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計	男子2		女子2		男女2		
		摂食者数(名)	4.9	5.0	9.9	1.0	2.5	3.2	1.9	5.5	6.8	1.5	1.0	1.4	7.2	9.7	13.1	15.5	20.3	25.2	
		摂食回数(回)				2.4	1.4	2.7		1.9	1.9	1.9	1.0	2.1	2.8		2.9		5.2		
		摂食率(%)	97.3	84.1	90.1	25.0	50.9	35.9	46.9	60.6	52.4	50.0	33.3	23.3	44.9	60.8	56.9	67.4	52.0	64.7	
						59.4	28.9	29.6		21.6	15.0	64.9	33.3	35.0	17.5		12.8		13.3		
1	月		4	6	10	1	2	3	2	6	8	1		1	8	13	14	18	22	31	
						3	2	5		2	2	2		2	5		4		9		
2	火		5	4	9	1	2	3	1	6	7	1		1	8	13	12	16	20	29	
						3	1	4		2	2	2	1	3	5		4		9		
3	水		5	4	9	1	2	3	2	6	8	2		2	10	10	12	16	22	26	
							1	1		2	2		1	1			4		4		

(注)「食べたか食べていなかったか」の入力のみなので、生徒の出欠状況は反映されていません。

この資料からは「出席しているのに食べていない」のか「欠席していた」のかは読み取れないのが現状で、反省点の1つです。

統計から端的に分かることには、2回目給食の摂食率は学年が進むに従い上がることや、遅刻の回数と相関があることは当たり前でしょうが、欠席・遅刻・早退の多い生徒ほど2回目を利用する傾向が強いことなどが挙げられます。

このことを参考にして実際の指導内容について検討を行いました。そもそも2回目に給食をとることが悪いのではなく、学校生活にとどまらず家庭での過ごし方も含め日々の生活全般が不規則なものになっていることが原因となっているのではないかと考えさせる機会として指導しようという結論に至りました。

指導方法として給食通信での呼びかけや各HR担任からの個別指導、また、全校集会を開いて生徒指導部長、教頭による講話も実施しました。

■継続は力なり

指導の直後から1, 2週間程度は効果が見られました。とはいえ人間はどうしても自分に甘くなりがちです。やはり指導は継続が重要です。給食室での声かけや日々の業務の合間に給食室での生徒の様子を特にHR担任に見てもらうことは、今後も引き続き呼びかけていこうと考えています。

■発明は必要の母?

統計結果は毎月末に全教職員に資料として提供しているところですが、資料を読む人が違えば、気づくことも違ってきます。

資料からは1回目・2回目の摂食者数および摂食率などが学年別・男女別にも分かるようにしている資料を1枚目として、また、生徒別にいつ摂食しているかを示す個別資料を2・3枚目として作成しています。この個別資料を見て職員室では「最近〇〇さんは2回目で食べるが増えているなあ」、「この2人は必ずそろって2回目で食べているけれど、どちらかが欠席すると1回目で食べているんだよなあ」などと話をしています。様々な視点から読み解いていることが分かります。職員室でこんな話がされていると他の教員も授業中の話をしてくれたり、養護教諭が最近来室が増えている当該生徒がこんな悩みを

持っている」と説明してくれたり」と、生徒に関する情報共有が進んでいきます。当初の目的から一歩進んで、生徒指導のためのさらなる情報収集のツールの1つとして活用されていることは、本当にうれしい限りです。

まとめ

■成果・統計結果から見えたこと・分かったことを指導に活かせる

□大々的なツール・評価テストを補完する情報の提供ができる

本校では子ども理解支援ツール「ほっと」や学校環境への適応感をはかる「アセス」を活用していますが、これらの実施に加え結果の処理などに時間と労力を要するため、それほど頻回に活用することはできません。

それに比べると給食の摂食状況統計は負担感なく実施し、情報提供・情報共有ができています。情報量は少ないかもしれませんが、「ほっと」や「アセス」から得る情報と相関が見られるものもあり、指導につなげやすいという効果も期待できます。

□「変化」に着目できる

給食は学校生活における「日常」の一部です。そこに見られる変化は、生徒の「生活習慣の乱れ」や「人間関係やその変化」、「心の変化」を示しています。

遅刻しないまでも1回目の給食に来られていない生徒は、やはり不規則な生活習慣が原因となって2回目の給食に顔を出しがちになります。また、今まで一緒に給食を食べていたはずの生徒たちが回を別にして摂り始めれば、「何かあったかな？」という気がしてきます。

休み時間や始業前、放課後の時間が限られる定時制にあっては、この「変化」に着目できるツールとして活用できることは何よりの成果だと感じています。

■課題・負担感なく統計記録作業を共有できないか

□「生徒と共有する時間」を増やしたい

始業から放課までが全日制と比べてとても短いため、教員が2回目で給食を摂ることは難しい状況です。とはいえ1回目と2回目の生徒の顔ぶれが違うことは事実ですから、実際に給食室に来て様子を見てもらうことが必要だと感じています。

統計により生徒の「変化」がうかがえた際には、実際にその変化を感じ取ってもらう目的で2回目の給食時間に足を運んでもらうことを、適時声かけしていきたいと考えています。

さいごに

実は昨年4月に赴任してまもなく、「給食カードを提出させるだけで何の意味もないならやめてしまってもいいかな」と考えたことがありました。日々の業務にきちんと目的があって有意義になされているかを見極めて無意味な作業は廃止する、いわゆる「断捨離」を進めようとの気持ちからでした。今回、「給食カードの提出」に新たな意味合い・目的を持たせ、給食室で過ごす生徒の時間を生徒指導へと活かせることができたことは大きな収穫でした。

「当初の目的にそぐわない」作業は直ちに廃止するというのではなく、「今ここでやる意味は何か」を振り返って検証し、修正・改善をして次につなげていくことができたわけです。給食員さんからの一言によって、PDCAの重要性についても再認識することができたことに感謝しつつ、給食員にはこれからも愛情のスパイスのきいた給食の提供を願っています。